茅野寛志著

残さるべき死

学生運動と闘病と学問に生涯をかけた東大生の手記

青木新書

65

1962年9月1日発行 ¥200.

編者 茅野寛志遺稿集
編集委員会

© 1962

発行者 青木春雄

印刷所 真珠社

発行所 株式会社 青木書店
東京都千代田区神田神保町 1−60
〔仮営業所〕千代田区三崎町2−42
電話 (331) 9969・9970
振替口座・東京 36582番

茅野寛志著

残さるべき死

学生運動と 闘病と 学問に
生涯をかけた東大生の手記

青木新書

65

刊行のことば

安保闘争を背景にして、闘病・学生運動・学問を、両立どころか三立させようと最後まで頑張った一人の学生をただ知ってもらいたい――茅野寛志君の遺稿集を刊行する私達のねがいはこの一言につくされる。生後はやくも一年目に始まり、最後にその生命まで奪った宿痾の喘息もち―愛する自然科学の研究を寸暇を惜しんでつづける東大理科生―安保闘争時代の激しい政治運動に全力を捧げる共産主義者同盟の一員―この三者が彼の中に同時に生きていた。

しかし、彼はけっしてこうした言葉で想像されるような強い個性の持ち主ではなかった。やさしく控えめで几帳面な、ごく普通の青年である。彼はひとつの世代や党派の秀抜な代表ではなく、むしろ平凡な最大公約数的なわかものであった。しかし彼が平凡であるだけ、私達はその中に自分達の行動や悩みのはしばしを見出すのである。だから私達は、共産主義者同盟というものが日本の革命運動史の中に存在した事実もふくめて、このままでは消え去っていかねばならないささやかな一般人の歴史を、こうして活字にすることによって世に残し、同時に私達自身の存在を確認したいと思う。

彼の平凡さの意味をもう少し考えてみよう。大学以前の彼は、ひねくれたところのない、おとなしくて親切で努力家で成績のよい、まじめだがわかものらしくない、多少ガッツキ屋の優等生であった。この平凡で誠実な優等生のイメージと、反体制運動に生命を捧げた闘士のイメージとは、どうにもうまくつながらない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

この二つをつなぐかくされた何かがあるはずだ。しかし彼の日記にも、彼のかくされた半面などというものは見当たらない。私達の目にうつったままの彼が、何の飛躍も何の転機もなく、担々と歩きつづけるようにみえる。だが、その日記の中でいちばん多く目についたのは、喘息の発作の記述であった。私達まわりの者も日記を読むまでは、これほどすさまじい力で病魔が彼の全存在の上に執拗にのしかかっているとは思いもよらなかった。しかし、ひとたびこのすさまじい力を念頭において彼をもう一度見直すと、すべては前と違った色合いで見えてくる。この病の巨大な圧力を向こうにまわして、彼という尋常な優等生を維持するためには、より巨大なエネルギーが必要であったことを想定しなければならない。

彼には、自分を特別視しようという願望はつゆほどもなかった。重症の喘息もちという特異な自分を、なんとかして尋常な・普通のわかものとして通用させようと苦心さんたんしているのである。人間形成期を闘病にくらした彼が、これほどノーマルな青年であったのは珍しい例であろう。〈平凡〉であったということは、彼の場合、むしろ彼の人生の偉業をしめすなによりのあかしである。高校・大学を通じての彼の勉学への執着も、不治の病の持主には、それは信じるほかない唯一の現状打破の可能性であり、そのようなおのれからの脱出のあがきであり、病への挑戦の表現でもあった。彼は呼吸困難のさなかにも本を離さず、デモから帰ると睡眠時間を犠牲にして机に向かった。

この本には、重複を避けるため、病の記事は大部分が省略されているが、茅野寛志の日記の真の内容は、よせてはかえす波のように果てしもなくくりかえされる同じ記録――つまり、発作の記録の重複を背景にしてはじめて理解されるのである。闘病を前提にするならば、忠実な優等生と、革命的前衛という二つのイメ

ージは無理なくつながる。病と闘うこの大きなエネルギー、現状打破への祈願はむしろ、反体制運動の闘士にふさわしい。

では、彼はどのような闘士、学生運動家だったか。彼が大学に入学した年に起こった砂川事件、ハンガリー事件、スエズ事件は彼にとって格好の研究対象であった。休学の期間に考えはみがかれ、共産主義に理解を持つようになる。彼が復学した年の夏、共産党は第七回大会を開き、左翼反対派を党から除名した。東大駒場はその反対派が結集したブント（共産主義者同盟）の拠点となった。彼の前には、六全協あるいはスターリン批判以後の日本共産党と、新しく生まれたブントとがあった。彼はブントをつくった世代ではなく、すでに存在したブントに参加した世代に属する。ブントをつくった世代にはなにがしか、日本共産党への過剰な愛憎の感情があった。それにひきかえ茅野君は何のゆきがかりもなく、ブントと日本共産党とをたんねんに見くらべたうえで、ブントをえらんだ。彼の進退が終始平静であったのは、そのことが大きく影響していたといえよう。その選択はブントの存在意義への正確な検討、冷静な現状分析の上に立っていた。彼はけっして熱に浮かされて行動し、雷同して参加したのではない。この卒直な行動性と冷静な客観性は、彼の二十数年におよぶ不断の闘病の経験のたまものであるが、一つには、彼の世代がどのような権威主義にも触れる機会がなかったためでもある。彼は戦時中は幼なすぎて天皇制的権威の影響を受けていなかったし、義務教育を受けたのは戦後の民主教育がまだ歪められていなかった比較的短い一時期であった。また彼は、スターリンという偶像の権威がほろんだ後に政治的にめざめた世代の一人であり、日本共産党の一枚岩の団結という権威ともかかわりを持ったことがなかった。したがって彼はどんな権威をも信じたことはなく、だから

権威の被害者になったこともない。彼の平静さはここから生まれた。

そうした彼が、安保闘争直後のブントの崩壊期に演じた役割は興味深いものがある。ガタガタになって前途の方針を見失ったブントの中で、四分五裂の理論闘争にあけくれている仲間を前にし、彼は一人あくまでも実践行動を主張しつづけた。それは、行動の傷跡にあえいでいた当時のブントの中では稀な考え方であった。彼は自分のその主張を、三池闘争の中に身をもって実行し、そして生命をおとした。

彼の日記は昭和二十年、小学校四年の初めから昭和三十五年十月、死の数日前までの十五年間、ほとんど毎日記されている。彼の死後、東大教養学部、翠嵐高校、栗田谷中学校の彼の恩師、学友、知己の多くが発起人となり、遺稿集の刊行が企てられた。そして学友をメンバーとする編集委員会の手で、大学入学以降の日記を中心にして編集された茅野寛志遺稿集『残さるべき死』が百名近い友人、後輩等の協力をえて、昭和三十七年二月に自家出版された。遺稿集は意外に反響をよび、購読の希望が見知らぬ人々からも次々と寄せられて、七百部の部数がたちまち不足した。おりよく青木書店から出版の話があったので、ここに青木新書版を公刊するはこびとなった。本書の内容は、自家出版の遺稿集を底本とし、青木書店編集部が遺稿集編集委員会の同意の上で、さらに日記を若干増補して充実を期した。とくに序章（六学入学以前）は、公刊を機会に新たに加えられたものである。

一九六二年八月

茅野寛志遺稿集編集委員会

神谷　美江　川口　喜昭　最首　悟　佐々木恭三　竹内　順治
田辺　裕　野口　宏　水口　俊典　宮原　昭夫　山田　周平

目次

刊行のことば……三

序章　東大へ入るまで
昭和30年3月～31年3月……九

第1章　入学と蓄積
昭和31年4月～33年3月……二七

あまだれ日記……八六
劣等感　道徳　天皇制の当否　宗教心　「なぜ日和見になるか」を読みながら　恋愛の本質　偶然性と必然性　自然弁証法
研究会入会の理由　「堂免君への手紙」より　生きる目的　限界　東大生とは　はったり　科学と宗教　『出家とその弟子』

第2章　新しい出発
昭和33年4月～34年7月……一二九
第3章　たたかいの中へ
昭和34年8月～35年10月……一八一
死・その後……〔母の手記〕二四三
三池での五日間……〔三池労働者からの手紙〕二四五
《資　料》……二五三
イデオロギーについて
前衛批判の正当性と重要性について
戦後を中心とした弾圧政策略史と現在の状況
あとがきにかえて……二七〇

装釘　山本耀也

序　章

東大へ入るまで

〔昭和30年3月～31年3月〕

高校時代の学友と伊豆旅行へ

www.erto

《高校卒業から東大合格までの一年間。高校時代の彼は成績は優秀だったが、本当にめだたない生徒だった。無口でやさしいひっこみ思案の優等生――他人には彼の闘病の半面が見えにくいから、そう思えたのだ。本当は勉学と持病の喘息との激しいたたかいの時期であった。ひんぱんな喘息の発作のたびに、寝床に横たわることさえできず、終夜坐りつづけて咳や呼吸困難とたたかわなければならなかった。ふだんは五分で済む登校時間が、三十分以上かかることもあった。そんな彼の学業が優秀だったことは、彼の闘病を知る学友たちには驚異であった。高校の担任の先生でさえ、この病弱な茅野君が東大を受けるのは無謀だと考えた。しかし、彼は初志を曲げようとはしなかった。自分の学業が病に敗北することにがまんできなかったのだ。

高校卒業の年の東大入試には、健康状態もわるく、失敗した。第二志望の横浜国立大学の入試は学科試験に合格して、入学する決心をした。ところが身体検査の日、折あしく喘息の発作が起こり、検査は不合格になった。こうして彼の浪人生活が始まった。このにがい経験から、身体検査を重んじる学校の受験をあきらめ、比較的に寛大な東大をだけ目標にした。しかし健康はいぜんとしてよくなく、勉強のスケジュールは発作でつぎつぎに破れた。病床に横たわりながら勉強し、少しでもぐあいのいい日は病の日の分をもとりもどそうと、勉強時間を倍加した。勉学の強化はいっそう健康をそこね、勉学不可能の日が増える――強い発作で失神することも珍しくなかった。浪人中の一年間の日記に、病の日々を数えてみると実に百五十二日あった。正直のところ周囲の多くの者は、彼の東大受験を無謀と見ていた。が、彼は屈しなかった。――意志強固で、たぐいまれな努力家ではあっても、平凡な東大受験生の一人であったといえよう。》

三十年三月一日

十時。先生、父兄母姉、来賓を前に翠嵐高校第七回卒業証書授与式が挙行された。最も緊張したのは、卒業者氏名で自分の名が呼ばれた時。代表が送辞を読んだ時、福田先生・校長の目に涙が光って感激的だったそうだが、惜しいことに気持がわるくてしゃがんでいたので、その気分にはひたれなかった。そのとき校長が、「これからも、遊びに来てくれよ」といったが、これは式次第になかったことだけに、校長に対する親しみが強く感じられた。

体の具合がやや悪かったためか、卒業式の真の気分が味わえなく、最後まで苦しんだような次第だ。

後、組へ帰って茶話会をやり、皆で歌などうたって、田辺・徳山・僕と三人で掃除をして運動場へ出た。いろいろ話したが話がつきず、今年も一回ぐらいはいいだろうと、二人を引っぱって家へ来、九時まで話した。話してみて、徳山を再認識した。一、二年の時とちがい、学問熱心で、考えることもしっかりしており、将来への道もがっちりと決っている。東大を受けるのをはじめて知った。田辺も、二年頃は冷たいガリガリの人間だと思っていたが、話してみるとそうではない。真実を話す人らしい。ともかく五時間以上お互いの人柄、人格、希望、交友、経験などについて心おきなく語った。校友達の女友達の話、信念の弱さから来るなやみの話等、今までこんなことが身のまわりであったとは何も知らなかった。ともかく今日ぐらいあけっぱなしで話したことはなかった。何人か真の友達と思っていた人も、実の友達ではありえなかった。しかしその原因は、自分の気の弱さ、自信のなさ、劣等意識、不必要な警戒意識のなせるわざであった。二人にはおどろかれたが、高校へ入って僕が話をしたのは今日がはじめてかとも思える。そしてこれからは、少

なくとも今日の二人には、末永く友としてつきあってもらおう。いや二人とはつき合おうと決心した。うれしい日だった。高校生活の一端をあらためて再認識した日だった。

卒業証書を仏壇にそなえて祖母に礼をいい、また父母に礼をいった。純真な心から出た礼であった。うれしかった。前途は明るい。

三月三日

薬でではあるが一応、喘息だけは治まって、なんとなくむかつくところはあったが、ともかく行くのにはさしつかえなくなった。十一時三十一分の横須賀線で、約束の田辺・古林と本郷へ向かった。東京駅から赤門の間で午前中の人々と会った。山口・太田などに会ったが、「大丈夫だよ」といっていた。試験場をさがしてから二十分ばかり休み、一時入場。ちょっと緊張したが、時がたつにつれて落ついて来る。まわりには皆いわゆる優秀な人がいるのだが、別に圧力は感じなかった。予想なんて当てにならないが、解Ⅰは今のところ全部出来たつもり。英語・国語も八割ぐらいか。総合で八割ぐらいはいったつもり。帰りは田辺と二人、話しながら横浜まで来た。朗報を期待して別れた。ともかく一日無事に済んだ。一沫の不安はあるが…。

三月十日

午前十一時、ポストから封筒を取り出し封を切るや、昨九日から今日にかけて最高潮に達していた不安は一挙に解消。一次試験には合格。二次試験をうける楽しみが生まれた。

先生への報告は、健康上の不安定より今日は見合わせた。父はわざわざ駒場まで見に行って下さったそうだ。武内さんからも「どうだった」との電話がかかって来たそうだ。

勉強に張り合いが出て来た。かなり、予定が消化出来た。でも、大分つかれた。あと三日のゆうよ。

三月十四日

東大入試第二次第一日。

昨日小川が伝達してくれて、今日は無事に田辺に会え、いっしょに本郷へ行った。

午前中は国語。かなり出来たつもり。午後は数学。やはりあがっていたのかなあ、あまり自信はない。しかし、まだ明日がある。明後日がある。

三月二十四日

横浜国立大学入学試験第一日。

東大の時と異なり、浪人も割に少ないようだし、その他にもいろいろ、気を楽にする原因が多くあった。先輩の激励は力をつけてくれた。

国・英・数。東大の時とちがい、数学は皆出来たつもり。合計二三〇～四〇のつもり。

朝試験前に、教えられたり教えたり、盛んにしている学校の生徒がいたのにはちょっとあきれた。今さらあんなにしてもそう効果はないだろう。特に数学など。〝山北*高頑張れ〟のハリ紙に少し懐しみを感じた。少しつかれて帰宅。日本史、化学をほんの少しやる。

* 神奈川県山北町は戦時中の疎開地。

三月三十一日

十一時半近く、とうとうやって来た。待ち遠しいものが。そして恐ろしいものが。結果は九分九厘の予測

が当って不合格*であった。そうは思ってはいたものの、少しの間、強い衝撃にあったような気がした。次に国大の道を選ぶべきか、浪人をすべきか、が問題となった。が、身体検査にパスする限り国大に行くべき運命が待っており、この際、国大に入れたらそこで一心に勉強すれば、その上には大学院がある。その時、東大でも選べる、と時の流れに順応した方法をとることに大体の心は決った。それにしても健康は大切である。

* 東大第二次入試の通知。

四月三日

父と母が、国大に石塚さんの遠い親類の先生がいるから身体検査のことを頼もう、などと話しているのを聞いてがっかりした。いつも潔べきの二人なのに。僕は全受験者と同条件下で試験・検査に臨みたいと母に言っておいた。特別扱いをされるのはいやだ。

東大に失敗してがっかりしたが、希望は大きくたくさんある。この際、健康状態がよく、国大へ入れればそれでよい。前途は洋々としている。

ああ。

四月五日

国大の学課試験の発表を見に行って来た。駅で降りて若宮大路へかかる所で古林達に会った。そこで結果はわかったが、やはり自分で見たくて学校まで行った。勿論入っていた。あまり当然のような気がして、感激的でなかった。

明日、明後日にわたって身体測定・レントゲン撮影・内診・面接が行なわれるらしい。今日は健康状態芳しからずして、明日が心配。

四月八日

昼食後、宮原宅へ行った。予定の一時より遅れたので、宮原・田辺・古林・徳山・赤崎・中島・柳下等が集まっていた。はじめにこれからの会*の運営、雑誌の発行について決め、つぎに日本の資本主義発展についてざっと話し合い、田辺の現状分析発表（不完全）の後、それについて、また人間の個性について話し合った。そうむずかしいことでもなく、ダベリングでもなく、有意義であった。夕食をごちそうになり、八時過ぎ解散。

＊路地の会第一回。旧ナリウス、パトスの会の後身。

四月十一日

12時の発表を9時だと思っていたので、早く鎌倉に着き過ぎ、八幡宮境内を歩いたり、持っていった「科学教育論」を読んだりし、とうとう国宝館へ入ってみた。古い仏像に面と向かっていると、中には自分がぐいぐいと圧倒されるようなのがあった。12時10分前、国大玄関にて発表を見る。自分の名前なし。くやしかったが止むを得ない。すぐ家へ帰って報告する。半分期待されていただけに、半分がっかりされた。来年を待とうといわれる。昼過ぎまでに残念の気持は来年への希望に変わる。すぐ先生に報告に行く。小山先生は涙さえ浮かべて残念がって下さり、気の毒な気がした。あんなにまで考えていて下さったとは気がつかなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto